

70. 地域と連携する宗教文化遺産の探査とアーカイブス化による文化遺産と社会の創成

龍谷大学 文学部 教授 阿部 泰郎

概要

全国各地域に遺存する多彩な宗教文化の所産を、地域住人と協働の探査とアーカイブ化によって記録し、多分野共同の研究による遺産化を介して社会と価値を共有し、未来に継承しようとする本研究は、2020年度より1年間の延長を加えて2024年9月に完結した。主たる対象は、福島県奥会津地方の真言寺院聖教典籍調査、愛知県三河地域真宗寺院の掛幅絵伝群と富山県南砺市の真宗別院が伝承する絵解き法会、そして滋賀県東近江市の全国にまたがる木地師の宗教文化遺産などである。この他、青森県津軽地方の寺院資料調査や、和歌山県全域の山間地寺社の文化遺産探査と保存事業も支援した。これら歴史・宗教的背景を大きく異にするそれぞれ特色ある文化遺産を、対象と地域毎に地域自治体と所蔵者、各分野の専門家と記録修復担当者等のチームを構成して探査からアーカイブ化、学術研究と成果発信まで一貫して展開した。特にそれらの文化遺産としての価値と地域に伝わる意義を地域社会と共有する機会を、提案し要望に応じて多様に設けた。この過程で解明された地域に伝来した文化遺産の特質は、それらが何れも中央の仏教文化の高度な達成を忠実に伝えた普遍性を有する知の媒体であることで、その先端的な学術成果は、国内学会のみならず海外の大学や国際学会などで紹介し高い評価を得た。

本研究は、全国に遍在する宗教文化遺産の僅かな一端に関与したに過ぎず、なお限らない対象が存在し、パンデミックや自然災害による滅失に絶えず脅かされている。紛争や社会の分断に直面する現在にあって、アーカイブこそは未来への希望となる営みであることを痛切に思い知った。このような状況の中で希望を与えてくれた三菱財団の助成に、深く感謝申し上げます。

背景および目的

日本の全国各地域には、それぞれに特色ある豊かで多彩な文化が息づいており、それが文化的多様性として、日本を世界でも比類ない魅力的な場所になっている。その大きな要因は、神仏習合に代表される独自の宗教文化であり、それらが長い歴史の中で生み出した膨大な所産である。各地域に所在する寺社や民間で守り伝えた堂祠には、仏神像はじめ、祭祀儀礼や伝承、絵画や書物まで、あらゆる位相の宗教文化遺産が今に伝えられている。しかし、現代の急激な社会構造の変化と、メディア文化の世界的な一元化は、こうした無数に存在した過去の豊穡な宗教文化の記憶を忘れ去って、放置され、失われるままになる事態を促進している。このような状況を座視すれば、未来の日本社会は、地域からそれぞれの多様な背景が生み出した歴史文化の拠り所が失われたままとなり、新たな文化を創成することもままならないだろう。

本研究は、日本各地の地域社会に伝存する特色ある宗教文化に注目し、それらを探査とアーカイブ化によって記録し、保存するだけでなく、その宗教文化遺産としての意義と価値を多分野協働による先端学術研究によって解明し、最新のデジタルアーカイブ技術によって得られた知見とデータを活用し、その研究成果を学界に提供するのみならず、その遺産を伝え、将来も継承する地域の人々と共有すること、更には、それらを資源として新たな地域社会の創成を促進することを最大の目標とするものである。

方法

その実践対象として、共同研究者と共に選び出した地域と対象は、当初、全国の7か所に及んだが、様々な経緯から、本研究の主たる実施対象となったのは、一つには、福島県奥会津地方の真言宗寺院に伝来する中世末期聖教典籍等の宗教テキスト群を広域で悉皆調査し、その背景を更に広く探ること。二つには、愛知県三河地域の浄土真宗寺院に多く伝存する大型掛幅絵伝、特に聖徳太子絵伝に代表される仏教説話画と、それらを用いた絵解き説法法会を現在も伝承している富山県南砺市の真宗別院井波瑞泉寺や城端善徳寺の儀礼文化を互に関連付けて総合的に探査すること。三つには、滋賀県東近江市の惟喬親王を始祖とする木地師の伝承文化及び史料と、全国の山間地にまたがって広がり伝存する木地師の生業伝承を繋ぐ試みである。また、青森県弘前市の大名家神社信仰資料と深浦町の真言寺院の聖教調査、静岡県富士市を中心とした富士山信仰文化遺産に関する調査研究、和歌山県全域の山間過疎地における仏堂・小祠に伝存する仏神像等の記録保存から地域自らの力によって保全する活動も支援した。

これらの各地域の社寺等に伝存する文化遺産は、どれも地域自治体の文化財担当者・教育委員会の関与と協力がなければ調査できず、何より所蔵者の寺社と地元共同体の合意が必須である。むしろそれらの対象の文化遺産としての価値を共に知り、認めるための信頼構築を優先し、その上で探査と記録によるアーカイブ化へのプロセスが始められた。記録保存の方法としては、奥会津地方の真言寺院の聖教調査においては、全ての資料を目録化する悉皆調査の方針で臨み、全点を分類整理して書誌情報を採訪し、全体のデジタル画像と合わせてデータベース化する事をめざした。三河地域の真宗寺院の掛幅絵伝については、修復を必要とする重要な作品に対象を絞り、高精細デジタル画像を取得できる最新鋭のスキャナーを導入して可能な限り現状の画像情報を得て、研究分析のためだけでなく、レプリカ制作や動画制作など様々な用途に活用できることを目指した。木地師の伝承文化など、民俗的な文化遺産探査については、本研究においては、木地氏の本拠地とされる東近江市の研究者と各地域の山村生活文化研究者との連携を相互交流によって築くネットワーク創成を支援することに徹した。また、既に調査対象とそのアーカイブ化を含めた地域社会との活用方向が定まり、実践中の青森と和歌山の場合には、旅費や機材費等の実際的な支援と、研究情報の共有と連携を主とした。既に長期間の調査研究の蓄積があり、一方でそれを踏まえた新たな文化創造の活動を展開中の富士市や熱海市伊豆山については、それら自治体や個人の活動を相互に結び付け、新たな社会協働を生み出すことを多面的に支えた。

本研究の遂行にあたっては、あくまで個人研究の範囲のうちながら、所属する龍谷大学の世界仏教文化研究センターの支援と、国内唯一の仏教専門ミュージアムである龍谷ミュージアムとの連携が極めて有効であった。このほか、各地域の自治体が運営する文化施設、資料館などとの担当者間との信頼関係による協力が大いに役立った。

結果および考察

本研究は、開始された2020年9月には既に本格的に流行していた新型コロナウイルスによるパンデミックの影響を直接被り、三年間の研究期間全てにおいてその影響下にあった。なお二回の研究期間延期を申請し、計四年間の研究活動を展開した。その間も終始、コロナ禍の影響を免れることはできなかった。本研究の特色である地域社会において伝承される宗教文化遺産を探査し、その記録保存を図りながらに価値の継承と共有を地域住民と共創することを目指すという方法は、殊に遠隔地の村落共同体や寺社では、受け入れ自体が不可能であった。こうした状況下にあって、共同研究者はそれぞれの地域において可能な限り探査と共有の為の活動を継続していたが、代表者はじめ、相互に協力して合同する大規模な調査は殆どできなかった。例外は、既に調査自体を地域自治体と契約を交わす形で開始していた奥会津地方の只見町や金山町の真言寺院聖教調査である。只見町黒谷の瀧泉寺からの大量の中世末期聖教典籍の出現と、それに先立つ真言僧祐俊が書写した『神皇正統記』の発見から、その母体となったのが、これらの寺院聖教であったことが明らかとなり、しかも同じく祐俊書写聖教を中核に含む聖教典籍が、同じく奥会津地方の南会津町龍福寺と金山町常楽寺、及び南会津町観音寺に伝来していることが明らかになり、これらの寺院の調査と整理、目録化を、各地域の自治体の教育委員会と共同して行うこととなった。従来から奥会津地方の書物文化の調査を民具研究から始めて持続している研究者と、中世真言宗の歴史史料研究の第一人者に参加いただき、共同研究者の所属する国立歴史民俗博物館に加えて、常楽寺聖教を既に収

集していた国文学研究資料館にも協力を仰ぎ、また名古屋大学の人類文化遺産テキスト学研究センターの参加も得て、これら奥会津地方の真言寺院における祐俊書写聖教の約250点に及ぶ全体像が明らかになり、戦国時代の中世から近世にかけての過渡期に諸国を旅して書写活動を行った学僧の軌跡が浮かび上がった。

さらに、祐俊が祐筆として仕えた智積院二世能化祐宜の活動事績とその膨大な著作も追跡され、或いは祐俊がその後を経験し修学した北関東の真言寺院にも探査を行い、貴重な資料を発見することになった。祐宜の著作や蔵書を伝える京都智積院の新文庫も閲覧し、祐俊書写聖教を含む多くの関連する聖教典籍を見出した。祐俊の足跡を訪ねて栃木県の全域から茨城県、更に福島県いわき市まで、広域にわたる中世真言寺院ネットワークに遺される宗教文化遺産を探査することができた。

これらの探査とアーカイブ化による研究成果は、概説を付した悉皆目録と重要資料の翻刻解説からなる報告書『奥会津真言寺院宗教テキスト文化遺産資料集』として編纂され、自治体、所蔵者、関係者と学術機関に配布したが、さらに、寺院の所在する地域において、各町と共催して報告会を行い、その記録を編集して小冊子を制作して頒布するなど、それらの遺産が伝わる地域住民やコミュニティにそれらの価値と意義が共有されるよう、あらゆる手段を尽くした。その結果、只見町と金山町では何れも町の有形文化財に指定され、収蔵書庫に保管されると共に、学術資源として国文学研究資料館による「国書データベース」搭載の為のアーカイブ化が進行している。

二〇二二年三月
阿部泰郎・久野俊彦・坂本正仁編
福島県只見町教育委員会・同金山町教育委員会・南会津町教育委員会・国立歴史民俗博物館・国文学研究資料館（協力）

奥会津真言寺院宗教テキスト文化遺産資料集

二〇二一年度版

名古屋大学人文学研究科附属人類文化遺産テキスト学研究センター（CHT）
JSPS研究拠点形成事業（JSPS Core Program）「テキスト学による宗教文化遺産の普遍的価値創成・学術共同体の構築」共同研究資料

【総説】	
奥会津地域宗教テキスト文化遺産の調査経緯とその成果……………	阿部泰郎 1
【第一部】奥会津真言寺院聖教	
概要と聖教目録……………	久野俊彦・他 7
只見町通泉寺・金山町常楽寺・南会津町龍福寺・同町観音寺・会津若松市自在院・京都市智積院・慶応義塾大学蔵『相澤朗詠集私注』……………	72
【第二部】修学僧祐俊と	
奥会津真言寺院聖教……………	久野俊彦 71
祐俊の聖教書写と奥会津真言寺院聖教……………	79
祐俊の旅と聖教——祐俊年譜稿・奥書一覧……………	阿部泰郎 105
【第三部】祐俊書写聖教等抜粋	
【御遺誡】（乾坤理砂鈔）（天地陰陽記）……………	131
【阿伽陀呪】（五輪経相事）（應和書）……………	132
【第四部】寺院僧侶史料・長善房祐宜年譜……………	坂本正仁 136
（後海門徒契状）（本寺傳受持来目録）解題・翻刻……………	150
長善房祐宜年譜（増補）……………	
中世末・近世初期における新義真言僧修学過程の一例証として……………	

奥会津において、戦国時代の古典籍が大量に発見されました。その数は300点を超えます。これらの多くは伊達政宗の会津侵攻の最中、玄純房祐俊という一人の学僧が書写したものです。そこには、『神皇正統記 只見本』（福島県指定重要文化財）をはじめとする貴重な古典籍が数多く含まれています。これらは、只見町をはじめ、金山町・南会津町・会津若松市に広く存在しており、会津地方全体の文化遺産でもあります。このシンポジウムは、新発見の資料にもとづき、戦国時代における会津地方の仏教文化を解明しようとするものです。

2021年 10月3日(日) 13:30~16:00

会場 季の郷 湯ら里
コンベンションホール「ゆきつばき」



只見町黒谷の龍泉寺から発見された中世古典籍

報告① 久野俊彦 (東洋大学講師)

戦国期の学僧祐俊の旅と文化遺産 —奥会津に遺された古典籍

報告② 阿部泰郎 (龍谷大学教授)

仏教典籍の中央と地方 —奥会津で発見された古典籍の価値

報告③ 坂本正仁 (大正大学名誉教授)

京都と東国の交流 —京方法流本寺僧の東国下向と会津

コメント 近本謙介 (名古屋大学教授)

阿部美香 (昭和女子大学講師)

ブライアン・ルパート (神奈川大学教授)

討論

テーマ「奥会津における新発見の文化遺産の意義と展望」

司会 小池淳一 (国立歴史民俗博物館教授)

入場無料 定員100名



インターネット同時配信 事前のお申し込みが必要です。
お申し込み <https://www.town.tadami.lg.jp/>

主催：福島県只見町・只見町教育委員会

福島県南会津郡只見町大字只見町下2591番地の30〈お問合せ〉TEL.0241-82-5320

共催：国立歴史民俗博物館 千葉県佐倉市

後援：福島県教育委員会・南会津町教育委員会・金山町教育委員会

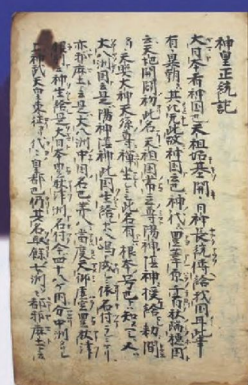
協力：日本学術振興会 (JSPS) 科研費基盤 (A) 「中世拠点寺院の蔵書と美術に基づく人と知のネットワーク解明」 (代表者：近本謙介)

助成：第49回 (2020年度) 三菱財団人文科学研究助成

「地域と連携する宗教文化遺産の調査とアーカイブ化による文化遺産と社会の創成」

シンポジウム

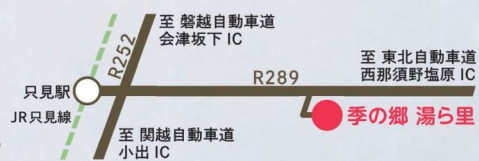
奥会津の戦国期文化をさぐる 学僧祐俊の旅と文化遺産



『神皇正統記 只見本』
天正15年 (1587) 祐俊書写



世に唯一の『乾坤塵砂鈔』
天正14年 (1586) 祐俊書写



季の郷 湯ら里 | 福島県南会津郡只見町長浜字上平50 TEL.0241-84-2888

常楽寺文化財説明会 「文化財の発見と未来を考える」



▲涅槃図 金山町大字玉梨 常楽寺内

金山町玉梨の常楽寺に、中世にさかのぼる貴重な文化財（聖教典籍）が、多数伝えられていることが近年確認され、これまで調査・研究が進められてきました。これらの文化財の意義と価値を知り、その保存と活用を地域の皆さんと共に考えることを目的として、下記のような説明会を開催いたします。これまでの調査の成果をわかりやすく報告するだけでなく、地域の皆さんとともにその未来について考える機会にしたいと思いますので、御参加いただきたく御案内申し上げます。

令和4年11月26日（土）10:00～12:00

会 場 金山町開発センター3階大会議室（大沼郡金山町大字川口字谷地 393）
定 員 50名（先着申込制）※新型コロナウイルス感染予防対策のため
内 容 裏面のとおり
申込方法 11月24日（木）午後5時までに、お電話またはメールにてお申し込みください。
メールの場合は、住所・氏名・電話番号・参加人数を記載の上、送付ください。
※土・日・祝日以外の平日に限ります。
申込み先 金山町教育委員会 電話：0241-54-5360
メール：kyoiku@town.kaneyama.fukushima.jp

金山町教育委員会 〒968-0011 大沼郡金山町大字川口字谷地 393
お問い合わせ先：0241-54-5360

【説明会内容】司会 小池 淳一氏（国立歴史民俗博物館教授）

- ①「文献調査と地域文化―世界へひらく日本の知―」
国文学研究資料館教授 齋藤 真麻理氏
- ②「常楽寺聖教への調査経緯と資料の概要」
ただみ・モノとくらしのミュージアム館長 久野 俊彦氏
- ③「寺院聖教と知のネットワーク―会津と結ばれる地域間交流をめぐって―」
名古屋大学教授 近本 謙介氏
- ④「真言密教の聖教と常楽寺聖教の特色」
大正大学名誉教授 坂本 正仁氏
- ⑤「常楽寺聖教のかたちとところ」
龍谷大学教授 阿部 泰郎氏
昭和女子大学講師 阿部 美香氏



▲常楽寺 金山町大字玉梨地内

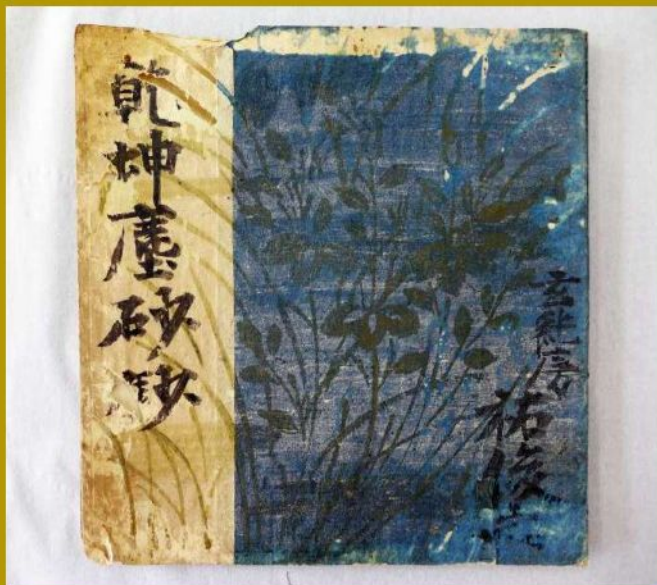
※なお、この説明会は下記の成果報告を兼ねています。

- ・第49回（令和3年度）三菱財団人文科学研究助成（大型連携研究助成50周年記念特別助成）「地域と連携する宗教文化遺産の探査とアーカイブス化による文化遺産と社会の創成」
- ・SPS 基盤研究 A「宗教テキスト文化遺産アーカイブス創成学術共同体による相互理解知の共有」（22H00005）

また、国内学界では説話文学会にてシンポジウム「学僧祐俊聖教典籍書写の旅」を開催し、共同研究者全員によって報告した。海外では、ハンブルク大学国際写本学研究センターにおいて日本の宗教写本の地方における典型例として紹介した。この他にも、個別の事例や資料の研究紹介は多数に上っている。

二〇二三年度説話文学会四月例会

学僧祐俊の修学と聖教典籍書写の旅 — 奥会津真言寺院調査の成果と課題 —



2023年(令和5) 4月15日(土) 13:00～17:00

大正大学(巣鴨・鴨台キャンパス) 5号館 531 教室

シンポジウム形式で開催(対面とオンラインによるハイブリッド方式)

プログラム 開場 12:40 司会進行 阿部泰郎(龍谷大学)・渡辺麻里子(大正大学)

- 13:00 開会の辞 渡辺麻里子(大正大学)
- 13:05 趣旨説明 阿部泰郎(龍谷大学)
- 報告 (1人30分予定)
- 13:15 久野俊彦(東洋大学・ただみ・モノとくらしのミュージアム館長)
『神皇正統記』只見本、『和漢朗詠集私註』慶応義塾大学本と
僧祐俊の足跡
- 13:45 小池淳一(国立歴史民俗博物館)
『中世末真言宗における陰陽道—「安部懐中伝暦」とその周辺—』
- 14:15 坂本正仁(大正大学名誉教授)
『中世末真言新義僧の修学における地方(田舎)と上方
—祐宜・祐俊ら修学活動の背景にあるもの—』
- 14:45～ コメント (1人10分予定)
- 15:15 渡辺匡一(信州大学)
- 15:25 ブライアン・ルバート(神奈川大学)
- 15:35 阿部美香(昭和女子大学)
- 15:45 全体討論・質疑(60分予定)
- 16:45 閉会の辞 渡辺麻里子(大正大学)
- 17:00 終了予定

本例会は、全国の地方が目下直面する地域の過疎・高齢化による衰退のなかで、急激に衰えていく民俗文化伝承と宗教文化の記憶遺産を、いかに救出保存し未来に継承していくかという課題に取り組むべき方途「宗教テキスト文化遺産アーカイヴス」の活動のひとつとして行う調査・研究の成果発信である。

主催 説話文学会

協力 国立歴史民俗博物館・名古屋大学・龍谷大学
福島県只見町教育委員会・金山町教育委員会・南会津町教育委員会

- * 三菱財団人文科学研究助成(第49回(2020年度)、大型連携研究助成50周年記念特別助成)
「地域と連携する宗教文化遺産の調査とアーカイヴス化による文化遺産と社会の創成」
- * JSPS 基盤研究 A「宗教テキスト文化遺産アーカイヴス創成学術共同体による相互理解の共有」(22H00005、研究代表阿部泰郎)
- * JSPS 基盤研究 C「古代・近代陰陽道史料群の歴史的変遷と相互関係の解明」(21K008558、研究代表梅田千尋)
- * Core-to-Core プログラム「テキスト学による宗教文化遺産の普遍的価値創成学術共同体の構築」(研究代表阿部泰郎)

「ミニ企画展」開催します (於)大正大学附属図書館8号館2階展示スペース
4月13日(木)～5月下旬(終了日未定) 9:00～18:00

愛知県三河地域の真宗寺院に多く遺される中世の掛幅絵伝は、宗祖親鸞聖人の絵伝だけでなく、法然上人や、日本仏教の祖師聖徳太子や善光寺如来絵伝の優品が多いのが特色である。特に太子信仰と深く結びついて、太子像を祀る太子堂に、これらの絵伝が複合して伝来する事例が知られており、それは絵解きによる念仏唱導の文化

遺産と想定される。真宗の太子信仰と結びついた絵解き法会の伝統は、今も富山県南砺市の真宗別院、井波瑞泉寺において行われる「太子伝会」に伝承されており、その太子堂の本尊太子像と中世の太子絵伝による絵解きは、遠く大阪の四天王寺にある絵堂の太子絵伝絵解きの系譜を受け継ぐものといえる。これらを繋ぐ重要な遺産が三河地域の真宗寺院に伝来する太子絵伝や善光寺絵伝なのである。

本研究では、それら三河地域にある太子絵伝と善光寺絵伝のうち最大の規模かつ最高傑作である安城の本證寺本（重要文化財）全十四幅を、文化庁による修復事業が開始されたのを契機として、修理前の状態を完全に記録することを第一の目的とし、併せて画像を細部まで探査しつつアーカイブ化して、今後の学術研究に提供することはもちろん、その画像データを利用して、所蔵寺院や地域自治体（安城市歴史博物館）で活用することで、地域における宗教文化遺産の再評価と保存継承を持続することを支援した。龍谷ミュージアムによる「真宗と聖徳太子」展（2023年3月～4月）に合わせて、本證寺と文化庁の許諾を得て、高精細デジタル画像を最先端技術によるスキャナーでデータを取得し、展示用のレプリカを制作した。この事業は、研究代表者による科学研究費と併用することで実現できた。



この本證寺絵伝のデジタル画像データとそれから作製したレプリカによる解析は、九幅に及ぶ大規模な太子絵伝全体の構成の中心に四天王寺が位置づけられ、しかもその要に他の絵伝に無い絵堂が描かれていることから、その太子絵伝絵解きの場において中世に成立した絵伝であることが明らかになった。四天王寺で行われた絵堂の太子絵伝復元研究からもこの仮説は裏付けられた。太子絵伝それ自体が自らのルーツを刻印するという認識から、太子絵伝の最初の成立の場であり、現在まで絵伝が継承されている四天王寺の絵堂の太子絵伝とその絵解

きが浄土真宗に伝承されて全国へ伝播し展開したという仮説が、その絵解き台本である『正法輪蔵』が中世の四天王寺で成立し真宗に伝来したことも含めて、多角的に立証されることになった。

これらの研究の進展と併せて、現在も太子絵伝の絵解きを「太子伝会」として伝承する富山県南砺市の井波別院瑞泉寺と、同じく太子絵伝を伝え、「虫干法会」に蓮如上人絵伝の絵解きを伝承する城端別院善徳寺の双方に、継続的に参与して学生とともに太子絵伝の絵解きを奉仕する活動が続けていたが、そのさらなる展開を企図し、龍谷ミュージアムでの「真宗と聖徳太子」展の際に「聖徳太子絵解きフォーラム」を開催したうえで、両別院と共催する「南砺絵解きフォーラム」を24年7月の法会期間中に開催することができた。両別院の僧侶による絵解きだけでなく、四天王寺僧侶による太子絵伝絵解きや三河すーぱー絵解き座が参加し、地域を超えて太子絵伝絵解きを介して相互に交流する機会が、本研究の助成によって初めて可能となった。

能登震災復興支援事業

7月26日 金 14時～17時

城端別院虫干法会絵解きフォーラム

於 善徳寺本堂

お問い合わせ 0763620026 城端別院善徳寺

蓮如上人北陸布教の遺跡を伝える
開帳法会の法宝物を一堂に集め
蓮如上人絵解きを継承する

井波別院聖徳太子伝絵解き
三河すーぱー絵解き座蓮如絵解き
四天王寺絵解き座蓮如絵解き
城端別院蓮如上人絵解き

来聴歓迎 入場無料

両フォーラム共通
●特別講演●
大福寺住職 太田浩史 師

●観合司会●
龍谷大学 阿部泰郎

7月27日 土 14時30分～17時

井波別院太子伝会絵解きフォーラム

於 瑞泉寺太子堂

お問い合わせ 0763820004 井波別院瑞泉寺

太子絵解き説法の伝統を誇る
南無仏太子像と金剛聖太子絵伝を伝え
蓮如上人蓮如以来八百年の歴史を継承

太子南無仏像御開帳絵解き
四天王寺絵解き座蓮如絵解き
三河すーぱー絵解き座蓮如絵解き
城端別院蓮如上人絵解き

夜間開扉
太子伝水遣り
蘇り込み

主催 龍谷大学世界仏教文化研究センター (RCWBC)
城端別院善徳寺 (26日) / 井波別院瑞泉寺 (27日)
後援 南砺市 協賛 二松社 龍谷大学 龍谷大学龍谷大学 水と匠

日本科学技術振興機構研究「家系ナスト文化遺産アーカイブス
龍谷大学共同研究による相互理解の共有」(22H00005)
三教財団法人科学学術 大規模研究助成「地域と連携する学際文化遺産の
調査とアーカイブ化による文化遺産と社会の創造」

さらに、これらの太子絵伝と絵解きを廻る研究交流の成果を踏まえて、研究期間終了後も、25年3月、米国カリフォルニア大学サンタバーバラ校で共催した国際共同研究学会「仏教の作り手たち」において、日本側のコーディネーターとして「四天王寺と聖徳太子の技芸文化」を司会、基調講演を務め、更に本證寺絵伝を紹介して如上の研究成果を紹介した。また、コロンビア大学では、ドナルドキーン日本文化センターによる日本文化講演会において、これらの活動の集大成として、共同研究者と共に「ニューヨーク絵解きフォーラム」を企画し、本研究で作成した本證寺絵伝のデータとレプリカを活用し、四天王寺と三河すーぱー絵解き座の参加を得て、ニューヨーク市民と研究者・学生達を観客として25年3月に開催した。



滋賀県東近江市の木地師文化遺産の研究については、東近江市による山と森の文化博物館（仮称）の設立を担う研究者に協力し、同じく木地師の伝承文化を伝える奥会津地方の研究者と、新潟県津南町と長野県旭村に跨る秋山郷をフィールドとする富士市の研究者を結びつけて、三者の交流を深めることで木地師の文化遺産を探查し永続的な文化遺産として継承する拠点とすることを支援する活動を展開した。研究期間中には秋山郷への共同探訪が実現し、木鉢作り職人の工房を新設博物館に移設保存する交渉が成立した。それにより、この後も継続的に交流を深める端緒が開かれた。

青森県弘前大学を中心とする深浦町円覚寺の調査研究も順調に進んでおり、共同研究者の転出後も、後任の研究者がその文化遺産化を推進している。和歌山県全域の山間地における宗教文化遺産の探查も、継続して進展しており、共同研究者の転出後も、和歌山県立博物館に文化遺産のアーカイブを兼ねた収蔵庫が設けられて、保存が必要な文化遺産を保管する活動が継続している。また、長期間にわたる共同調査研究によって貢献してきた富士市かぐや姫ミュージアム及び静岡県富士山世界遺産センターとの、富士山信仰文化遺産に関する活動では、代表者と共同研究者が長年にわたり創作に関わってきた伊豆山から富士山に及ぶ宗教世界の歴史と伝承を芸術的に図像化した中村芳楽氏制作の「富士山絵伝」四幅の完成に伴う絵解きを催して博物館とのコラボレーション企画を実現したのに加え、絵伝の舞台となった三宅島へ、絵伝のレプリカを寄贈するのに同行して、その原典となった鎌倉時代後期写本『三宅記』の調査を行うなど、地域社会との共有を目指した活動を展開した。

以上、凡そ本研究課題の助成を得て遂行した諸研究活動の成果を、直接かかわるものについて挙げた。これらの成果を総合してはじめて見えてくるものは何であろうか。日本全国の各地方・諸地域に遍在する宗教文化遺産の存在様態は、実に多彩であり、それぞれ特色にあふれて、高度な達成を見せる芸術性を有するものから、民俗的で自由な個性を発揮するものまで大きな振幅を示す。そのうえで、本研究の探查とアーカイブ化の試みの間に経験され、感得されたのは、それらの豊かな宗教文化遺産の諸相が一様に示す、興味深い普遍性の相貌である。

それは、奥会津地方に伝来する真言寺院聖教典籍の全体像を把握したところに出現した祐俊書写聖教の、中世を通じて形成された仏教教学とその修学階梯の所産である宗教テキストが示す、中世日本の聖俗両面を兼ね備えた学問が築き上げた普き知の体系というべき高度な水準であり、中核をなす真言聖教の教相と事相の体系に加えて祐俊が書写した『神皇正統記』と『和漢朗詠集註』に、端的に象徴されている。またその背後にある、祐俊の仕えた師である祐宜の、根来寺を介して諸宗兼学の学問を経歴しながら自ら膨大な著作をものする旺盛な活動が示す、普遍的かつ全国的な文化の様態である。これらが、現在は過疎の僻地とされる奥会津地方に集中して伝世していることは、その書物群を視座として追跡された学僧たちの知の所産が高度な達成と普遍性を有するものであることを明らかにした。それはまた、奥会津とは全く隔絶したかに見える津軽の深浦町円覚寺に伝来する真言聖教の、京都醍醐寺からもたらされた分を含む高い水準の典籍群とも照応しており、そうした事例は全国各地にわたって随所で確認されるのである。

地方の各地域に所在する寺社に伝来する宗教文化遺産が、中央で制作され大寺社に伝世するものに匹敵する、或いはそれら以上の高度な水準を示すものが存在することは、決して稀ではない。もう一つの研究対象である三河地域の真宗寺院に伝来する聖徳太子絵伝を始めとする大画面説話画群もまた、種類を異にするが同様な現象を

呈する宗教文化遺産であった。その絵伝の構成と布置それ自体が雄弁に語るように、その代表である本證寺太子絵伝は、太子信仰の中核拠点である四天王寺絵堂の太子絵伝壁画を忠実に伝える点で、全国に広がる太子信仰の空間と儀礼の文化伝承を担った人々とその運動を伝える証であった。その太子絵伝の絵解き文化を現在も伝承する南砺井波瑞泉寺の太子伝会でも、やはり中央から伝えられた中世の大規模な太子絵伝を持ち伝えているが、本研究の成果は、これら中世の絵伝をデジタル技術を活用しつつ、両地方に伝承される太子絵伝を用いた絵解きの文化を互いに結びつける社会的活動に及んだ。更に四天王寺で復活された太子絵伝絵解きも参加して、三者を結ぶことにより生ずる地域社会相互の歴史的記憶の交流とその再認識を促したことも、本研究によって成し遂げられたことである

そうした宗教文化遺産についていう「中央」とは、単に都を指すのみではない。木地師の文化遺産についてみれば、皇位から追放された惟喬親王が隠棲した小椋谷の山中を本拠とする神社の神人が「氏子狩り」として全国の山間地に散在する木地師を組織して作り上げたネットワークと彼らが共有する伝承文化は、山と森の自然環境を利用するものづくりの普遍的な技芸文化の宗教文化遺産といえるものであり、これもまた、社会的位相を異にしながら地方と中央の相互不可分な関係性を端的に示すものであろう。

これらの諸事例から導かれるさらなる課題は、それらが示す中央と地方を宗教文化遺産を媒介として繋ぎ結びつける、交通・交流のあり方そのものである。それは、街道や海路、そして山中の道という、全国各地を結び付ける多重・多元的な人と文化の回路である。修験道がよく示すように、その往来を担って動かしたのは、まさしく宗教の役割であり、その牽引力こそは、宗教文化遺産の蔵する力なのであった。

(完)

発表論文、社会活動等

- 1) 阿部泰郎、渡辺麻里子、久野俊彦、小池淳一、坂本正仁、渡辺匡一、ブライアン・ルパート、阿部美香、2023年4月例会シンポジウム「学僧裕俊の修学と聖教典籍書写の旅－奥会津真言寺院調査の成果と課題」(『説話文学研究』59号、2024年)
- 2) 龍谷大学 龍谷ミュージアム、親鸞聖人御誕生850年・立教開宗800年記念特別展図録『真宗と聖徳太子』2023年。
- 3) 小池淳一編、阿部泰郎、久野俊彦、坂本正仁、ブライアン・ルパート、阿部美香『奥会津の戦国期文化をさぐる－学僧裕俊の旅と文化遺産』2023年。
- 4) 阿部泰郎、久野俊彦、坂本正仁編『奥会津真言寺院宗教テキスト文化遺産資料集』名古屋大学人類文化遺産テキスト学研究センター、2022年。
- 5) 阿部泰郎「宗教遺産学の実践としての宗教文化遺産アーカイヴス構築－龍谷大学による「宗教テキスト文化遺産アーカイヴス研究基盤」創設のために」(木俣元一、近本謙介編『宗教遺産テキスト学の創成』勉誠出版、2022年)。
- 6) 大河内智之『仏像は地域とともに－みんなで守る文化財－』和歌山県立博物館施設活性化事業実行委員会、2022年。
- 7) コロンビア大学ドナルド・キーン日本文化センター主催「Etoki(Picture-Storytelling)from Japan」コロンビア大学、2025年3月開催。